

第41年度（2025年度）ソフトウェア品質管理研究会 分科会紹介

「ソフトウェアレビューを再定義」

「レビューは、ソフトウェアの品質を向上させる重要なプロセスだ。」

「レビュー指摘に対応してくれれば、成果物の品質が向上する。」

「レビュー指摘を受けた開発者も『悪さの知恵』を学んでくれる。」

このように私は考えていますし、このような認識のもと、レビューを実施している組織が多いかと思えます。

しかし、実態はというと、理想的な状態にはなっていないケースもあるのです。

「初回レビューに出される成果物の品質は一向に向上していない。」

「2回目、指摘箇所は修正されているけど、別の箇所に同じミスが残っている。」

「修正したことによる悪影響で、別の箇所で新たな問題が生じてしまっている。」

なぜこのような状態になってしまうのでしょうか？

レビュー指摘の伝え方が悪いのかもしれない。ということで、追加のレビューでは修正すべき箇所を全部洗い出して影響範囲も含めて修正方法まで伝えてあげます。しかし、このようなレビューが頑張るやり方では、作成者の対応は本質的には全く変わりません。類似の問題や他の箇所への影響は考えず、直接言われたことだけを修正するという対応を逆に促進してしまうことになるのです。本来は、作成者が自分で考え見直すべきなのに。。。

レビューが頑張れば頑張るほど、作成者が考えなくなり受け身の対応になってしまう。このような状況を脱却するためには何が必要なのでしょう。もしかしたら、レビューの定義そのものを見直す必要があるかもしれません。

「レビューとは、成果物に入り込んだ欠陥や不備を見つけること」

レビューの定義はこのようになっています。表現は違うかもしれませんが、皆さんこのように認識されているかと思えます。レビューでは、作成者の作業ミスや考慮漏れによる欠陥や不備を検出して作成者に伝えることが主な活動になります。そのため、作成者にとってはネガティブなアクションばかりと認識されることが多くなります。その結果、作成者のモチベーション低下を招いてしまい、作成者が受け身の対応に終始してしまう可能性があるのです。

これまで、レビューの定義はこういうものだ当たり前のようには考えていましたが、2024年度のSQiP研究会のレビューコースでは、このレビューの定義そのものを見直すことで、作成者のモチベーション向上、そして、受け身の対応ではなく能動的な対応へと変革できるのではないかと考え、1年間研究して参りました。その名も「褒めるレビュー」です。

「褒める」とはどういうことなのか、「褒める」となぜ良いのか、この研究について、気になる方は、3月頃に日科技連ホームページで研究論文が公開されますので、ぜひご覧ください。

本コースでは、ソフトウェアレビューに関して、現場で抱えている課題を研究員の皆さんと指導講師陣が一緒になって解決・改善していきます。生成 AI の活用など最新のトレンドを踏まえた研究やレビューの定義を見直すなど抜本的な改善の研究まで幅広いテーマを対象としています。

皆さんも是非研究会に参加して、レビューの技術を学び、課題を解決する新しいレビューのやり方を一緒に考えてみませんか？

主査である私（中谷）と副主査の上田さんは、元研究員ですので、研究員の皆さんに寄り添って研究活動の支援を行います！アドバイザーの安達さんは、ソフトウェアプロセス改善手法 SaPID の提唱者であり、様々な企業のレビュー改善、プロセス改善に貢献されていますので、研究員の皆さん、所属組織にとって価値の高い、意義ある研究へと導いてくれます！